
喫茶店の恋

愛華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶店の恋

【Nコード】

N8753U

【作者名】

愛華

【あらすじ】

喫茶店でバイトをしている主人公。

そこで出会った青年に惹かれ、次第に“告白”の文字が頭に浮かぶようになる。

主人公の告白、そしてその後を描いていくストーリーです。

恋の始まり（前書き）

初連載です！！

あたたかく見守って下さると嬉しいです
ミ

恋の始まり

私は近所の喫茶店でアルバイトをしている。

そこに来るある客は、大体日曜日の10時から11時の間に店に姿を現す。

しかし、その客は毎週喫茶店に来るわけではない。

来る日は不規則であり、来る人数も不規則なのである。

人数というのは不特定の友達と来るから…。

日によって2人で来たり、日によって3人で来たり、日によって4人で来たりと、その日によってまちまちなのである。

そんな客に私は魅せられてしまった。

なぜわざわざ喫茶店で話をするのかは私にはわからない。

けれど私は彼に惚れてしまったのである。

恋の始まり（後書き）

次回はもっと文字数増やします。
+・
)・
(・
+・
。
。

注文を聞く(前書き)

短くなてしまいました(^-^
すみません(- - ;)

注文を聞く

ある日の朝のこと。

時刻は10時38分。

彼はいつもの席に3人の友達を連れて座った。

私はそれを見て彼らの席に行き、「注文はお決まりでしょうか？」と口を開く。

すると彼は「コーラを1つ」と私に注文してきた。

私はそれに対して「コーラがおひとつですね？」と聞き返し、他のメンバーの注文を聞いた。

すると、コーラが2つになり、他にはソーダ水とアイステイヤーが加わった。

私はその注文をカウンターに持っていき、伝票を整理した。

ここで、整理している私の光景は傍^{すがた}から見ればいつもと変わることはないだろう。

しかし、彼のことが気になって、気が散っているのが、今の私の現状。

少しだけ聞こえる彼らの声…。

それが私に“盗み聞きしろ”と囁く。

もはや、幻聴でしかなかったが、私は盗み聞きをするために耳を澄ました。

注文を聞く（後書き）

次回は長くしますよ、、

たぶん。。。

彼女という存在（前書き）

まだまだ短すぎですよ、

頑張って長くしていきたいです）＊・ω・＊（ゞ

彼女という存在

「最近可愛い奴を大学で見たんよ!」

「でも、どうやら2年らしくて話す機会がないでダメだわあ」

「そっちはなんか可愛い奴とかいた?」

そうやって私が惚れた人の隣に座る人が言う。

その答えを私が惚れた人の向かい側に座る人が言う。

「あー、こっちはいねえや」

「なんせ理系学校じゃん?」

「女自体少ない上に、いても平均点以下ばっかだぜ?」

「マジありえねえよ」

それに返事したのは私が惚れた人の斜めに座る人。

「そうなの?」

「俺なんて女子ばっかだぜ?」

「看護系だからまあまあな奴もいるしよ、」

「ところでカズはどうなのよ?」

つと話の流れ的に私の惚れた人のことだろう…。

そうやって私は惚れた人の名前？呼び名？を知った。

「ああ？」

「俺は別になんもねえけど？」

それだけで終わった“カズ”の言葉に向かい側に座る人が言う。

「じゃあさあ」

「彼女とは進展があつたわけ？」

「俺達の中で早々と抜け駆けした奴がよお…」

『ええ？』 彼女がいたんだ…。

私はここで、少しショックを受ける。

しかし、そのショックはすぐに元に戻った。

彼女という存在（後書き）

台風大丈夫ですかね??

不思議な会話（前書き）

長く書くことをあきらめました。

『私にはどうやら無理！！』

ってことに気づきましたから（笑）

不思議な会話

「ああ、香織のことか、ゝ、ゝ」

「あれはあつちから告白してきただけ…」

「それで、俺は付き合ってる奴もいなかったからOKを出しただけって言っただろ？」

「誤解はやめて欲しいな…」

そうやって“カズ”が言う。

「いやいや誤解なんてしてねえぜ？」

「お前はOKを出した！」

「それが抜け駆けてこと！！ おわかりかな？」

嫌味っぽく“カズ”の斜めに座る人が言う。

「おいおい、それで抜け駆けは無いだろ？タクヤ！！」

どうやら斜めの人は“タクヤ”と言うらしい…。

「それに香織とはもう別れたって」

「あいつ寝ることしか考えてないんだぜ？」

「俺がそういうの嫌いってお前らも知ってるだろ?？」

ここで“カズ”の隣に座る人が突っ込む。

「だから別れたってことか…」

「それなら許してやろう!!我が友よ!!」

『なんなんだろう?この会話…』と思いながら、私は少し笑ってしまった。

不思議な会話（後書き）

男の子の会話はあまりわかりません（涙）

同僚の存在（前書き）

連載の方がご無沙汰になっていましたね

同僚の存在

それから20分が経過した頃、カズ一行は帰ってしまった。

『はあ、、、』

そうやって私がため息を吐くと、同僚？の武智隼人君たけちはやとが私に声をかけてきた。

「どうしたの？」

「元気ないじゃん！！」

ここで話が変わるが、私は正直、武智君が苦手…。

その理由は私にしつこく付きまとうから…。

これは別に私がモテるとかそういったことが言いたいわけではなく、ただ単に私は構われるのが嫌いということが言いたいだけ…。

なぜなら、そもそも私はこれまでに2回しか告白されたことがない。

それを『十分じゃん！！』と思う人もいるだろう。

確かに、私もそう思う。

けれど、大学に入るまでに2回しか告白されたことのない人間が、はたしてモテると言えるだろうか？

私は言えないと思う。

“モテる人は何をしてもモテるわけで、何の取り柄もない私はモテる”という言葉からかけ離れていると思う。

本題から逸れてしまったのでもとに戻すとする。

とにかく、私は武智君が嫌いだ。

これは事実であり、この先も変わらない事実だろう。

同僚の存在（後書き）

実は、私もバイト先に苦手な人がいるんです（笑）

好きな人（前書き）

これからは、連載の方に集中します

好きな人

次の日曜日。

私は9時に喫茶店に入る。

今の時間は、客数が少ない方…。

多くなるのは10時を過ぎた頃、、

私はそれまで、着実に作業を進めた。

「いらつしゃいませ！」

「今日は何名様でしょうか？」

すると家族連れの方々が、「4人です」と答えたので、

「禁煙席ですか？喫煙席ですか？」 と私は聞き返す。

すると、「禁煙席で」と家族連れの方々が答えたので、

「では、あちらの席へどうぞ！」 と私は言う。

それから、少し時間が経過した頃、、

私の前に彼が現れた。

私はそれを見て、すぐさま「何名様でしょうか？」と聞く。

すぐに聞いたのは、他のアルバイトの子に聞かれると嫌だから…。

好きな人と少しでも話していたい。

それは不思議なことではないでしょう？

私はそうやって、カズ一行にメニューを聞き、飲み物を席まで運んだ。

好きな人（後書き）

好きな人とは、長く話したくはありませんか？

飲み会メンバー（前書き）

名前を変えました^^

飲み会メンバー

私が席に飲み物を運んでからしばらくして、“カズ”が口を開いた。

一番最初に彼が口を開くのは珍しい事だ。

私はそう思いながら、話を聞くために耳を澄ました。

「もう夏だし、高校時代の奴をかき集めたいと思うんだけど…」

「どう？」

そうやって“カズ”が口を開く。

それを聞いた人が言う。

この人は前回いなかったたので誰かわからない。

「いいんじゃない？」

「誰誘うの？」

そう言って、“カズ”に聞き返す。

「シユンは誰が言いわけ？」

すると、“シユン”と呼ばれた人は言う。

「うーん、誰って言われると困るけど、ここにいない連中だと、“ケイ”と“トモ”と“ユキエ”と“ミズホ”かな？」

それを聞いて、前回“タク”と呼ばれていた人が言う。

「はあ？女も誘うわけ？」

「別にいらないでしょ？」

「俺は飲みに行くなら、女はいらなと思うけど？」

ここで、前回“カズ”の前に座っていた人が言う。

「そうかな？」

「俺は、いた方が楽しいと思うけど？」

「確かに、男の会話で盛り上がれはしないけど、それはそれで楽しいと思うよ？」

そして、“タク”は折れる。

「確かに、、、な、、、」

「まあ、ミズホとかにたまに会うのも悪くないな！」

そんな感じで、飲み会？のメンバーが決まった。

彼への好意

また一週間会えなくなる…。

私はそんな寂しさを背負って、学校に向かった。

まず始めに、私は大学に到着して、香里のところに向かった。

香里とは高校1年生からの付き合いで、もう3年以上一緒にいる。

「最近元気くない？」

香里が私を気遣ってそう言う。

私はその言葉に、「そう？」「別に普通だけど？」と答える。

しかし、私の心は、実際普通なんてものではない。

彼と会えないことがこの上なく苦痛に思える。

本当は、彼のことがずっと前から好きだった。

それは、大学に入るずっと前から…。

私はその時から彼に好意を抱いていた。

具体的にどこがいいか？

そんなことを聞かれてもよくわからないけど、とにかく私は高2

の初バイトの時から彼が好きだった。

これが、一目惚れなのかはわからない。

しかし、私は気付いたら彼に惚れていて、気付いたら“私にとって彼は気になる存在”になっていたというのは事実である。

彼への好意（後書き）

次回は急展開です！！

最悪な日（前書き）

予告した通り、急展開なはず!!

最悪な日

私は、彼に会うのを楽しみにバイト先に行った。

しかし、その日彼は来なかった。

そして、この日は、私にとって最悪な日となった。

「はつきり言うよ？」

「俺はさあ、あんたのことが好きだよ？」

「あんたは俺のことが好きかい？」

「好きなわけないよねえ？」

「あんたの好きな人をボコボコにしたんだもん！！」

「なかがわかずき中川和樹君は今、病院だよ？」

「だから、俺なんて嫌いで当然！！」

「だよね？涼子ちゃん」

けらけらと、人をあざ笑うかのように、腹を抱える武智君。

始め私には、武智君が何のことを言っているかわからなかった。

しかし、武智君が自分のことを「好き？」と聞いたことと、和樹という名前から、私には武智君がしたことがわかってしまった。

私は、喫茶店中に響く大声で、武智君をせめた。

冷たい視線

「カズ君に何をしたの？」

「カズ君は今どこにいるの？」

その質問に、答えようとしない武智君。

正直、叫んでいるところが、バイト先だということを気にしてられない。

みんなからの冷たい視線が飛んでくるのがわかる。

けれども、自分で自分の口を止めることは私にはできなかった。

「ねえ、何処なの？」

「カズ君は、無事なの？」

そうやって叫び散らす私を、抱えるようにして止める、同僚の女の子。

武智君の前に立ちふさがる、店長。

けれども、そんな状況の中で、武智君は店長に向かって、「彼女、

頭がおかしいんです」と笑いながら言った。

それからしばらくのことを私は覚えていない。

これが“意識が飛んでいた”ということだろうか？

私は、無様になった自分の顔を、鏡を通して見つめた。

腫れ上がった瞼。ひどく充血した瞳。

もう、涙さえ滲まない。

私は、どうやって辿り着いたのかもわからない自分の部屋を出て、カズ君を“カズ”と呼んでいた人を探し歩いた。

冷たい視線（後書き）

暑いですね。

飲み物の飲みすぎで、おなか壊しそうです

ゲームセンター

彼等は、私が思ったよりも早く見つかった。

どうやら、喫茶店の近くの高校出身で今は大学生になっている、私の同級生だった。

もちろん、私は彼等と高校は違う。

だから、彼等がどこの誰かを探さなければいけなかった。

まず、私は近くを通りかかった高校生に、「カズと呼ばれている人が、病院に送られたっていう話を知らない？」と聞いた。

すると、「そんな話は知らないけど、カズ先輩なら、すぐそのゲームセンターにいると思うよ？」とある高校生が教えてくれた。

私は、教えてもらったカズ君がよく行っていたゲームセンターに、足を運ぶことにした。

彼等から見れば、後輩にあたる生徒たちは、なかなか先輩として尊敬しているらしい。

要するに、彼等は人望のある？人達だと言うことだ。

まあ、そんなことは置いておき、

私は、教えてもらったゲームセンターに到着した。

ゲームセンター（後書き）

ごめんなさい。

少し、連載スピードが遅くなります。

存在意義

しかし、喫茶店で見かけた人達はどこを探してもいなかった。

『はぁ・・・』 私は、心の中でため息を吐いた。

好きな人を、好きでいるのに、どうにもできないもどかしさ。

話したこともない。

けれど、好きでいる。

そんなもどかしさが、私自身を苦しめる。

私は、そんなもどかしさを抱えながら、ゲームセンターで話している女の子グループに声をかけた。

「あのさ、、、」

「カズって人が、ここに来ていたと思うんだけど、知らないかなあ？」

そう言った、私をまじまじと見る女の子グループ。

『なんだろう？』と、私が違和感を覚えた直後、

「何てめえ？」

「あいつの仲間？」

「表に出るよ！」

と私の胸倉を、突然掴んできた。

「痛い！」

「何するの？」

私がそう言うと、「こんなカスに、カズをぼこぼこになんてできないよ」と、私の胸倉を掴んだ子じゃない子が言う。

正直、悔しかった。

正直、自分が情けないと思った。

ただ好きなだけ、、

それだけの理由でこそそそと嗅ぎまわる、私。

私は、彼にとって何者なのだろう？

知り合い？

いや、向こうは私のことなんて眼中にないのかも、、

こうして、私はカズという存在が見れなくなった。

存在意義（後書き）

思ったのですが、女の子は“ぼこぼこ”とかあまり言わない気がします…。

お見舞い

相手が落ち着いた時、私はようやく話を聞いてもらえた。

「カズって人のお見舞いがしたい！」

この声のおかげで…。

私は、彼女たちに勘違いをされていた。

武智君の仲間だと思われたのである。

だから、彼女たちは私の胸倉を容赦なく掴んだのである。

考えてみれば、私よりもカズ君と仲のいい人間が、怪しい人間に
始めから優しくするわけがない。

カズ君のされたことを考えれば…。

そもそも、私はカズ君を見たことあるだけで、接客以外で話した
ことはない関係なのだが…。

そんな私の話を最後まで聞いて、「いいよ、会わせてあげる」と
1人の女の子が言った。

一部の人は話を聞いて、「こんな人間は信用できない」と言っ
ていた。

私は、自分がカズ君を好きでいること、そして私を好きな人が、
自分勝手にカズ君を傷つけたことを話したからである。

けれど、「会わせてあげる」といった人は、グループ内で威厳の
ある人であるらしく、私はカズ君に会うことを許可された。

エレベーター（前書き）

更新遅れてて、すみませんε||（・ω・）……

エレベーター

一部の人たちは、ゲームセンターを出て病院に行くまでの道のりで、かなり不機嫌だった。

そして、許可を出してくれた人も、機嫌は決していいとは言えず、病院に向かうまで私は空気の重さに耐えていた。

病院の中に入り、許可を出してくれた人が、受付横のエレベーターのボタンを押す。

すると、エレベーターの扉が開き、5階のボタンを先ほどと同じように押す。

彼女たちのグループ全員が病院に来たので、正直エレベーター内に人がいっぱい息苦しい。

そんな感じのエレベーターをみんなで降り、私は彼女たちに連れられ廊下を進む。

病院らしい静かな廊下に、みんなの足音が響き渡る。

そんな中、私は気が付いた。

『もうすぐ、カズ君に逢えるんだ』ということに。

いつからか、バイト先にくる男の人を好きになっていた私。

そして、いつしか目で追いかけるようになっていた私。

ずっと、ずっと、気になっていて。

その思いを伝えたくて、今度は本人に会いに来た。

目の前に、彼が現れると思うと、ドキドキする。

こんなことを体験できるなんて、私は本当に幸せ者である。

エレベーター（後書き）

最後のところは詩みたいな感じにしてみました
どうでしょうか（＾－＾＊）？

彼との会話（前書き）

約1週間ぶりの更新になってしまいましたΣ（□ 111）

本当にすみません。（ノムム）。

彼との会話

後で知ったことなのだが、「会わせてあげる」と言った人は、カズ君の元彼女の香里という人だった。

なぜ、彼女が私をカズ君に会わせてくれたのかはわからない。

けれど、彼女のおかげで私はカズ君に会うことができた。

それは、どれだけ感謝したところで事足りない。

私はそのことを胸に置き、病室の扉をノックした。

「どうぞ」

少し重たそうな声が扉の向こうからする。

私は、香里という人に「お願い」「外で待っていて」と告げた。

そして、私は中に入る。

すると、彼は何気ない顔でテレビを見ていて、私のことを私がベッ
シドの前に到着するときにやっと見た。

そして、彼は私を見て不思議そうな顔をしたので、私は慌てて言
葉を口から洩らした。

「初めまして…?」

「一応は始めましてではないんだけど…」

「私の」と…」

すると、彼はここで私の言葉を遮り、話し始めた。

「わかるよ、君のことは…」

「俺がよく行く喫茶店でバイトしてる子でしょ?」

「どうしたの?」

「よくここがわかったね」と少しだけ微笑みながら…。

本当のこと（前書き）

更新遅い割に、短くて申し訳ないです（ - A - ）
ア・・・

本当のこと

私は彼に、カズ君に本当のことを告げた。

「——私はあなたのことが好きなの……」

「だから、こんな風にここまで来た……」

「あなたは……」

「あなたは私のせいでこんなことに……」

「だから、それを謝るためにも……」

「本当にごめんなさい」

「私のせいで……」

「本当に……」

私はここで、言葉を止めた。

もう、話す資格などないと思ったからだである。

私が勝手に好きになっていて、それでけがを負わせて、それで何

が言えるだろうか？

私はそう思った。

しかし、彼は違った。

「そうだったのか…」

「実は、実は俺も——」

お互いに

「実は俺も好きだったんだ！」

私はこの言葉を聞いた瞬間、自分の耳を疑った。

喫茶店でバイトをしている人を好きになった私。

しかし、その想いは無駄ではなかったのだ。

私が好きになった彼は、いつからだったのかは知らないが、私のことを想っていてくれたらしい。

ようは、両想いということである。

「嘘でしょ？」

私は、彼に言葉を告げた。

もう、本当に自分の耳が信じられなくて、、

彼の言っていることが現実だとはとても思えなくて、、

私は“再確認”という手段をとってしまった。

すると、彼は照れながら、「何度も言わせないでくれよ」「告白
っていうのは恥ずかしいんだから」と言っ
た。

始まりのキス

彼の言葉を聞いて、私は心を落ち着かせることにした。

いくら緊張したところで、

いくら胸を高めたところで、これが現実ということは変わらないんだから。

少しして、彼は退院することになった。

彼の怪我也、そこまでは酷くなかったので、軽い入院で済んだのだ。

だが、私はいまだに、武智君が憎い。

いくら後遺症が残らなかったとはいえ、

いくら彼と私を結び付けてくれたとはいえ、彼に怪我を負わせた相手を許せるわけがない。

そんなに私は優しくはない。

だが、本人は、彼は違った。

「もう許してやれよ」

「あいつもすごく謝ってたじゃん」

「もういいんじゃない？」

これは彼が、退院後2週間して口走ったセリフである。

「あなたは、どれだけ優しいのよ!!」

私は、彼に思いつきり突っ込みを入れ、キスをした。

それは、私が初めて彼にしたキスで、

彼のことを“大好き”だと自覚した時だった。

始まりのキス（後書き）

これで内容自体は完結です。

初めての連載作品でしたが、楽しく最後まで書くことができました。

今までありがとうございました（*・ω・*）ゞ

もしよろしければ、感想・ポイント評価等を下さると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8753u/>

喫茶店の恋

2011年10月1日11時09分発行